優秀賞（中学校部門）

「和歌山フルーツ大改革」

和歌山県立桐蔭中学校　一年　　木本　理沙

二〇四〇年の和歌山。二〇二四年現在から十六年後である。今十三才の私が二十九才、アラサーの時に見る和歌山は、いったいどのような姿をしているのだろうか。

現在、和歌山はこのままいくと大変なことになる、という状況になりつつあると思う。まず、仕事がない。これでは若者は和歌山を出ていくしかない。そうすると少子高齢化がますます激しくなる。どれほど良い未来の可能性があっても、それを作る若者がいないのでは話にならない。

では、どうすれば良いのか。そのヒントを私は見つけた。私は今年、中学校に入学して和歌山市外の友達が多くできた。その中に紀の川市の友達が２人いた。私はその２人の会話を聞いて、未来でも残れるであろう和歌山の、産業的強さを兼ね備えた魅力を発見した。「フルーツ」である。

和歌山は「フルーツ王国」と呼ばれるほど、フルーツの栽培が盛んである。例として生産量が日本一のフルーツをいくつか挙げると、みかん、うめ、かき、いちじく、じゃばら…と、多くのフルーツが出てくる。この成果を活かして、私は和歌山を

「日本のフルーツの要、和歌山大農園」

にしたいと思った。そして、フルーツの育て方を近代化し、現在の少子高齢化に向き合うことができる形にしようと考えた。和歌山大農園計画はこうである。まず、使われていない土地やあまり機能していない建物、人の住む一部の住居や必要のない山々を全て破壊し農園とする。（住民の思いや森林破壊についてのことで文句も多いだろうが、多少の被害もなく大きな変化を遂げることは不可能だ。）次

に、農園を機械やＡＩで管理するため、紀北に１つ、紀中に２つ、紀南に１つの司令塔を作る。そこで二十四時間体制で監視をする。万が一、ＡＩや機械が誤作動を起こした場合は、司令塔で監視をする人間が直接操作すれば良い。この方法で、フルーツを育てる。最後は、フルーツの出荷である。フルーツの出荷は主に、大阪に近く人口も集中している和歌山市を中心にしようと思う。和歌山市は和歌山県の県庁所在地であり、一番の都会。交通の便も良いため出荷の作業には最適であると思われる。

　これら３つの工程を踏んで、私は和歌山をフルーツの大農園にしたいと思う。少し無理な計画かもしれない。だが、この計画ならば少子高齢化であっても、若者が和歌山から転出せざるを得ない状況であっても、和歌山には安心のできる明るい未来が待っていると思う。私がアラサーになった時に、和歌山大農園計画によって、和歌山が輝いている姿を見ることができることを、願っている。